ことばの生態

情報時代のコミュニケーション

入谷敏男

NHKブックス 78

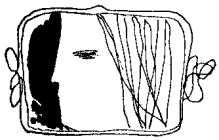
NHKブックス 78
ことばの生態 情報時代のコミュニケーション
検印廃止 定価二八〇円
昭和四三年一〇月二〇日第一刷発行
著者 入谷敏男
発行者 加藤正夫
印刷 三秀舎
製本 石津製本
一〇〇東京都千代田区内幸町二-一-一八
発行所 日本放送出版協会
振替 東京四九七〇一

落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします。

ことばの生態

—情報時代のコミュニケーション—

入　谷　敏　男



78

NHK ブックス

©1968 Toshio Iritani

Cover Takashi Kono
Susumu Fujii

はしがき

一昨年の暮もおしせまった頃、東京大学の時実利彦教授と御一緒にNHKの「科学千一夜」という番組に出演したことがある。「ことばの鎖」というテーマで、人間の発することばがどのような働きにもとづいて起こされるかを、生理学的、心理学的に考察したものであった。

そのとき以来、私は人間のことばの働きというものに対して、何かもっと新しい見方・考え方ができないものかということを、折にふれ考えつづけてきた。

日常においてはことばの問題がさまざまの形で論議されている。特に最近のめまぐるしい社会変貌の結果は、ことばの使用価値というものがないがしろにされ、生活の片すみに追いやられようとしている。人間の理性的判断によることばの自由な話し合いは禁じられ、行動が優先し、その背後に無形の指力が抬頭しているかのようにみえる。

一方、内外においてことばに関する研究は近年著しく進み、多くの研究結果が発表されているが、何かわれわれの日常生活と縁遠いものであったり、日常で生じていることばのさまざまな問題、ことばと社会の問題に対しては、あまり直接に解決を与えてくれていないような気がしてならない。すなわち高度に発達した科学的方法をとり入れた研究と、日常面でわれわれが

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

経験することばの種々の面とが互いにすれ違ってしまっているように思われるのである。

本書に書かれた小論は、右にのべた二つの側面のみぞを多少なりとも近づけ、両者の間の間隙を少しでも少なくすることを念願として書かれたものである。

内容はどちらかというと、人間の発することばという不可思議な現象を、その背景あるいは周囲に働いている場という観点からとらえたものであり、社会の工業化、都市化という状況をふまえて、それが人間の意識面にどのような変化を与えているかを考慮しながら、ことばの働きの種々相をさぐってみたものである。

こういった現代の状況をかえりみて、日常に疎外化されつつあることばによるコミュニケーションの新たな出発が行なわれることを念願すると共に、今後のことばの研究が、こういった現代の社会心理学的文脈を一層深くとり入れた方向に発展することを期待してやまないものである。

最後に本書出版のきっかけをつくり、筆者を終始励まして下さった日本放送出版協会の田口汎氏、原稿に関し御尽力戴いた大矢鞆音氏に深く感謝の意を表したい。

昭和四十三年十月　　著　者

目次

第一章　コミュニケーションと場……〔九〕
一　伝達と環境……9
二　意志の疎通……17
三　二つの場—文脈の場と記号の場……23
四　相互理解とは……32
第二章　時間的系列としてのことば……〔三五〕
一　文脈の時間的性質……36
二　言語記号の時間的性質……39
三　経験による時間のわくづけ……50
第三章　意味の力動性……〔五七〕

一　欲求と意味……58
二　体験と意味……69
第四章　ことばの深層構造……〔八一〕
一　意味の深さと文の深さ……82
二　内言語と外言語……92
三　深層構造と日本語……98
第五章　構造としてのことば……〔一一一〕
一　ことばの結合方式……112
二　構文の生産様式と把握様式……121
三　構文と意味の体系……127
第六章　映像とことば……〔一三七〕
一　心像と映像……138
二　映像から言語へ……144
三　伝達媒体としてのことば……155

第七章　ことばの社会工学……〔一六七〕
一　情報科学の思想……168
二　コミュニケーション体系の確立と調整……175
第八章　ことばの未来学……〔一八九〕
一　ことばの進化と人間……190
二　社会の進化とことばの働き……199
三　ことばの生命……203

第一章　コミュニケーションと場

一　伝達と環境

最近、ことばが乱れているとよくいわれる。これはことばそのものが乱れているのか、それともことばを使用する人間の心が乱れているために起こるのか、二つに分けて考えなければならない問題であろう。しかしことばを使うのは人間なのだから、人間がことばに対してどのような反応を示し、またそれをどのように用いるかによって、ことばが乱れて使われたり、整然と使われたりするのであって、ことばの乱れというものは、最初からあったのではなく、それを用いる側の人間によって起こったものだと考えられる。

もちろんことばがどのような過程をへてどんな乱れ方をしているかを、ことばの構造自体の研究から進めていくゆき方が考えられるが、私はことばが乱れてくるのは、それを常に使用し

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

ている人間の側から生ずるのだということ、それがことばの形態的な乱れをつくるのだということ、したがってことばの乱れを考察するのはその時点における人間の状態、とくに人間と環境との関係において考察することが必要であるというとの前提に立って、これからの論を進めてみることにする。

ことばが乱れるのは、それを使用する人間がそういった状況をつくり出すからであるといったが、乱れるとはいったいどういうことか。語彙の形態においてであれ、語と語の結合によって生ずる文法的ルールの使用においてであれ、語の表現的用法であれ、対人関係において用いられる語であれ、いずれも正規の状態から逸脱しており、聞き手あるいは第三者からみて異様な感じを与えることである。話し手としてはこれらの正規の使用を知っていながら、逸脱した状態のものを使ってしまうという場合であり、また正規から逸脱していても、ちょうど方言や流行語のように、特定の話し手と聞き手の間では正常とされている場合があり、そのような場合は、ここでは問題としない。ここで問題とするのは話し手から発せられる標準語が正規を脱しており、聞き手に異様な印象を与えるという場合についてである。

そこでこういった「ことばの乱れ」を追求するための一つのゆき方として、日常の話し手と聞き手の間にことばのとりかわしの行なわれる種々の場面を考えることから出発してみよう。

われわれは一日に数知れぬ種々の場面にめぐり会い、そのたびごとに何人という人間と接触している。そしてそのたびごとに何らかの形のコミュニケーションが行なわれている。目くばせ、にらみ合い、ほほえみなどの種々の表情、手ぶりや首ふりなどによる種々の合図からはじ

まって、様々のことばの表現によるコミュニケーションが行なわれている。種々の交渉や請願、演説や講演、応援や怒号、そして生活のすみずみに聞かれる問答や説得、打ち明け話やうわさ話に至るまで、これらが無数の騒音や雑音にまじってわれわれの耳につんざくようにひびきわたってくる。

まさに今日の産業化・都市化が生んだ生活は、騒音とことばの修羅場である。こういった環境の複雑化が、ことばの乱れを起こしているということにはならないであろうか。

環境の複雑化、多様化がことばの乱れをかり立てる、これはたしかに起こりがちなことである。連日おびやかされている生命の危機から身をまもり、周囲をとり巻くさまざまな人びとに適応し、そしてしかも一定の仕事に精神を集中する。——考えてみるだけでも大変なことである。われわれの神経はたえずいらだち、緊張し、焦燥や不安を起こしている。しかもこれらの神経の活動は、その大部分がことばの使用ということに使われている。こういった複雑・混乱化した事態が、たえずそのときの精神の状態に合ったようなことばをわれわれに選ばせてしまう。そこに正規のことばの状態から逸脱したことばの乱れが生じてしまうのではなかろうか。

温度の著しく冷えこんだ日には、人びとの発することばもかじかんでいるように聞こえる。またいやな嗅いのするときには、人びとは思わず声をおとし、鼻にかけたことばを発する。よく晴れ渡った暖かい日だとか、あたりによい匂いがただよっていたり、目の前に美しい花が置かれている場合には、思わず明るいはずんだことばを発するのをわれわれは経験している。周囲の環境が一定の秩序をなしており、これらがわれわれの感覚器官に適度の刺激として受け取

られる時、精神活動は快適な状況におかれ、これがわれわれの言語行動を起こすのに最も適した状態をつくっているとみることができる。

ところで昨今の日常の情態をみるとどうだろう。自動車はけたたましいサイレンを鳴りひびかせ、排気ガスをようしゃなく吹き散らしていく。街頭宣伝の音はひっきりなしに入ってくる。どこかの見知らぬ男女がぶしつけにも自分とすれすれに通りすぎる。満員電車の中など、たまったものではない。たえずはき出される熱気と汗、これらにまじってどぎつい香水、真白なワイシャツにふれる口紅、露出した腕にふれる毛むくじゃらの髭、それに加えてどよめく人びとの話し声、駅の場内アナウンス、このような環境にいるだけで、われわれの感覚器官は異常に興奮し、われわれの精神状態をいらだたせるのに十分な環境条件をつくっている。

アメリカでプロクセミックス（proxemics）という学問が起こっているが、これは人間の周囲を占める小空間との関係を研究・開発していく分野で、人間の生存するのに最も適した空間を計画・設計していくことを目的としている。アメリカの文化人類学者エドワード・T・ホールがその提唱者であるが、わが国においてもやがて建築学や都市計画などに豊富にとり入れられていくようになるであろう。

ホールはつぎのように考えている。人間は、一連の伸縮自在の〝球形の空間〟によって包まれている。この球形というのは手ざわり、匂い、感じ、見るなどを含む感覚経験の広がりのことである。そしてこの球形は人と外界を結ぶと同時に、外界から保護する働きをしている。この相互作用が行なわれる大切な空間にあまり大きな圧力がかかると、人の生命は危険にさらさ

れることになる。

人口の集中化と生活の都市化、そして人間の移動による混雑からくる環境の圧迫は、われわれの感覚器官が自由に呼吸しうる空間をしだいにうばっているのではなかろうか。われわれがそれにもとづいて適宜な行動を起こすべく定められている空間――感覚器官の働きにもとづいてつくられるナワバリ――がいつのまにかおかされており、その結果無抵抗のイライラや不気嫌の状態を生じていることになるのである。

ところでこの感覚器官の働きによって自らの行動を律するためにでき上っている生理・心理的空間とはいかなるものをいい、どれぐらいの大きさのものをもっているのであろうか。

ホールによると、人を取囲む空間は四つの部分に分かれており、その各部分は容易に区別され、測定できるという。

まず自分に一番近い空間、すなわち他の人が腕を伸ばすとこちらの身体に触れる範囲は親密帯とよばれる。これは求愛したり、慰めたり、保護したりする場合の二人の間の距離をいう。たとえば満員電車やエレベーターの中のように、赤の他人をこの「親密帯」から締出せないときには、われわれはストレスを感ずることになる。このようなときには、ただ両手をしっかりと体につけて、天井の広告にでも目をやり、黙りこくっていることが、その場から逃れる最大の策であるという。

そのつぎの周囲をとり巻く空間は個人帯といわれ、腕を伸ばした先から約一・二五メートルまでの空間で、通常個人的な会話を行なう距離であるという。

第三の球形の空間は、体の中心から一・二五メートルから三メートル遠ざかったところまでを占める空間帯で、これを社交帯という。種々の会合で話をしたり、事務所でいっしょに働いたりするのに好適の空間がこの社交帯であるという。

この外縁を取囲む、すなわち三メートル以上離れた空間を社会帯とよび、いわば当人にとっては、直接交渉をもたない空間であるという。

この社交帯から社会帯にうつる区域が、二人の人が直接ことばのとりかわしを行なうか行なわないかの境い目だとホールは指摘する。すなわち、ある人が他の人に近づいてきて、三メートルの円内に入れば、二人の間で話のとりかわしが行なわれる場面をつくるのに十分な緊張状態をつくるという。

アメリカでの場合、たとえばオフィスにきた客が受付嬢の三メートル以内に腰を下ろせば、彼女はその客に声をかけなければならないと感ずるのが普通であるという。しかし、もし三・五メートル以上離れていれば、彼女はお客に構わずタイプをつづけてもよいことになるという。

こういった空間帯の大きさは、決して万国共通なものでなく、各国の文化や国民性によって、個人間、社会的な相互作用の型がそれぞれ異なるので、それに相応して空間帯の大きさも大きく変化するという。

このような事実は、世界中のさまざまな生活の型の違いにより、人口の過度の集中から生じるストレスに対する個々人の反応の仕方を大きく決定することにもなるであろう。

われわれはこの空間帯の各領域に、自分の周囲をとり巻く種々の人間を定位することができ

ると考えられる。まず自分の周囲に最も近い親密帯には、自分の家族、夫婦、恋人、親友をおくことができる。個人帯には学校や職場での同僚の人びとなど、日常たえず接する機会の多い人を想定し、社交帯には時折接して仕事の面でいっしょになる知人、事務職員、御用聞き、保険外交員、医者など、社会帯には、近所に住んでいて時折顔を合わせる人びと、職場や通勤の途中で時折挨拶をかわす人びとがこの帯に該当し、さらにその周囲の無縁帯には、以上を除いた自分と関係のない赤の他人が存在することになる。

このような空間的配置によって、人びとを自分と一定の距離におき（物理的距離に対応して心理的距離をつくり）、このような秩序にしたがって行動することが、その自然的な活動状況からして最も適しているように思われるが、日常では必ずしもこういった秩序が保たれているわけではない。たとえばラッシュ・アワーのときなど、無縁帯に属すべき人びとが最も自分に接近して入り込んだり、また親密帯にいるべき人びとが遠くへ離れていたり、また社交帯にいるべき人びとと個人帯にいるべき人びとが互いに入れかわったりしている。こういった場合には、人びとの心理的平衡が乱され、彼等を不快の状態におとし入れる結果を招く。

一方われわれは、親密帯、個人帯にいるべき人びとが一〇メートル以上、あるいは一〇キロも、数十キロも、また数千キロも離れていても、これらの人びととコミュニケーションをとりかわすことができる。

すなわち電話、電信、手紙などによって、コミュニケーションの場をつくることができる。今日のぼう大なマス・メディアの発達は物理的空間の距離を縮少し、心理的（行動的）空間の

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook